論文

山口方言語彙を用いた国語科教材としての「おみくじ」の作成

池田　史子

１．はじめに

地域的な日本語の位相差である「方言」についてのとらえ方は，時代や社会の情勢によって変容してきた。かつて，「標準語」に対する方言を，排除し撲滅すべきものと考えた時代があった。その時代の方言に関する劣等感を，柴田（1958）は，「方言コンプレックス」と名付けている。しかし，1980年代ごろになって，人々がそれまで身につけてきた言葉と新しく身につけた「共通語」を，場面や心情によって切り替え，使い分けるようになると，方言に付加価値が生まれて「アクセサリー化」と呼ばれる現象が生じた（小林 2004）。そのような，方言をアクセサリーのように「かっこいい」，「誇らしい」と受け止める段階を経て，現代では，「おもしろい」，「楽しい」というような娯楽としての側面が追加され，「方言おもちゃ化」の時代を迎えたと言われる（田中 2007，2011）。また，最近では，震災・災害の際に地域復興の力として方言が活用されたり，方言研究によって医療・福祉分野への支援を目指す取り組みが行われたりもしている（東北大学方言研究センター 2012，今村 2014，今村ほか 2017，友定2017）。

学校教育の場面でも同様に，各時代の社会情勢やそれに伴う教育観，方言に対するとらえ方の推移に合わせて，国語科教育の中の方言の位置付けに変容がみられる。1947年（昭和22年）版と1951年（昭和26年）版の『学習指導要領（試案）』，そして，1958年（昭和33年）告示から始まり，2017年（平成29年）３月告示の新しい『学習指導要領』に至るまで，国語科教育における方言の位置づけが明確に示されている。新しい『学習指導要領』でも引き続き，我が国の言語文化に関する事項として，「共通語と方言の果たす役割について理解すること」が求められている。そこで，日本語学研究室では，山口方言について親しみ，日本語の方言について再評価する契機とするために，上述の娯楽としての側面も考慮して，山口方言語彙を用いた「おみくじ」を作成した。国語科教育における方言の位置づけ，方言の役割を理解するための活動・教材を概観することで，作成した「おみくじ」の意義について考察する。

２．国語科教育における「方言」の位置づけ

今村（2004）にも指摘されているように，1947年（昭和22年）に始まる初期の『学習指導要領（試案）』やその影響下にある検定教科書において，方言は，「なおす」，「避ける」ものとして記述されている。方言と相対するものとしては，規範性が高く，「正しい」，「標準語」の存在が大きい。『学習指導要領』は，この後，約10年ごとに，各時代の社会情勢やそれに伴う教育観に合わせたアップデートが行われてきた。今村（2005，2008a，2008bほか）では，1968年（昭和43年）告示『学習指導要領』までの，国語科教育における方言の位置づけが詳細にまとめられている。

本稿では再び，1947年（昭和22年）版（試案）から2017年（平成29年）３月告示の新しい『学習指導要領』までの，小学校・中学校国語科における方言の位置づけの変容を簡単にまとめた上で，山口方言について親しみ，日本語の方言について再評価するための山口方言語彙を用いた「おみくじ」作成の意義について考察する。なお，2008年（平成20年）告示の『学習指導要領』までは，国立教育政策研究所学習指導要領データベース作成委員会作成のデータベースを，2017年（平成29年）３月告示の新しい『学習指導要領』は，文部科学省初等中等教育局教育課程課のウェブサイトを利用した。

1947年（昭和22年）版『学習指導要領（試案）』では，国語科学習指導の目標として，「なるべく，方言やなまり，舌のもつれをなおして，標準語に近づける」と記述されている。そして，小学校４・５・６学年の国語科学習指導の「話しかた学習指導上注意すべき点」として，「できるだけ，語法の正しいことばをつ

かい，俗語または方言をさけるようにする」という記述がある。規範意識が高い「標準語」を学習目標として設定していることがうかがわれる。

1951年（昭和26年）版『小学校学習指導要領（試案）』では，第３学年の「話すことの学習指導」として，「教科書や，いろいろな読み物の文を読んだり，ラジオを聞いたりすることによって，自分の使っていることばの中に，幼児語・方言・なまり・野卑なことばなどのあることに気づかせ，だんだんとよいことばや，共通語を使わせていくようにする」と記述されている。ここでは，「共通語」と表現されていても，「方言・なまり」を「よいことば・共通語」と対比させるなど規範意識が強く含まれているので，「標準語」と同等の意味で使われている。第４学年に上がると，「方言を使わないで話したり，自分の語法の誤りを認めることができるようにする」と，自分の語法について方言以外のことばと比較して正誤判断するような，より高度な能力が求められるようになる。

そして，今村（2005）も指摘するように，次の1958年（昭和33年）告示のタイミングで，大きな改訂が行われた。『小学校学習指導要領』から「標準語」・「共通語」・「方言」という用語が姿を消し，第４学年では，「全国に通用することばとその土地でしか使われないことばの違いを理解すること」，第５学年では，「全国に通用することばで書くようにすること」，第６学年では，「必要な場合に全国で通用することばで話すこと」という記述に置き換わっている。方言は，排除される対象ではなくなり，「全国で通用することば」で話さなければならないのは「必要な場合」で構わないことになった。連続する学年の『中学校学習指導要領』第１学年においては，「話しことばと書きことば，共通語と方言などのそれぞれの違いを考えさせる」と記述されている。自ら相違点に気づくことを指導されるのであって，絶対的な到達目標が設定されているわけではない。また，ここで用いられている「共通語」という用語には，前代の「標準語」のような規範意識は感じられない。

1968年（昭和43年）告示『小学校学習指導要領』では，第４学年の「ことばに関する事項」において，「共通語と方言では違いがあることを理解し，また，必要な場合には共通語で話すようにすること」という記述がある。学年としては２年間の隔たりがあるが，『中学校学習指導要領』の第１学年「ことばに関する事項」において，「共通語と方言の関係」を理解させることになっている。初めて，「関係」という表現が見られる。

1977年（昭和53年）告示『小学校学習指導要領』では，第４学年において，「必要に応じて共通語で話すようにすること」が求められている。それまでの「必要な場合」という記述が，「必要に応じて」という記述に変更され，場面や自己の置かれた立場をより客観的に認知する能力，ことばを切り替えて使用する能力が求められるようになった。

1989年（平成元年）告示『中学校学習指導要領』では，方言に関する記述が，それまでの第１学年から第２学年へ移動した。「共通語と方言の果たす役割などについて理解」するとあるように，「役割」を理解することは，より高度な俯瞰的視点や批判的思考力を必要とすることから，学年の移動があったのかもしれない。

この後，『学習指導要領』自体のアップデートは続いたものの，しばらくは方言に関する記述に目立った変化は見られなかった。2008年（平成20年）告示『中学校学習指導要領』からは，第２学年の方言に関する記述の領域がそれまでの「言語事項」ではなく，「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」とされた。この領域移動については，河野（2012）に詳しい。

2017年（平成29年）告示の新しい『中学校学習移動要領』では，「わが国の言語文化に関する」事項の内容として「共通語と方言の果たす役割について理解すること」の項目が見受けられる。前回からの相違点としては，配当学年が第２学年から第１学年へと移動していることが挙げられる。『中学校学習指導要領解説　国語編』（文部科学省 2017）に，「今回の改訂では，小学校第５学年及び第６学年との接続を意図して，共通語と方言の果たす役割について理解することを第２学年から第１学年に移行している」という記述がある。学習内容の連続性が考慮された結果である。

以上のように，初期の『学習指導要領』に記述された国語科教育における方言の位置づけは，規範的な

「標準語」と対比されて，「さける」「なおす」ことを求めるものであった。しかしながら，現在では，それほど規範性の感じられない「共通語」との違いや関係を理解し，場面・状況を考えたり判断したりしながら，必要に応じて使い分けて表現する能力を身につけ，共通語と方言の果たす多様な「役割」を受容する時代となった。

３．「方言」の役割を理解し受容するための活動・教材

近年，学校教育の内外で，共通語と方言の違いを理解し，必要に応じて使い分けながら，共通語と方言の果たす役割を理解し受容するための活動が行われたり，教材が作成されたりしている。

例えば，山形県三川町の全国方言大会や大分県豊後高田市の「方言まるだし弁論大会」（佐藤亮一 2006）のような，方言を用いた寸劇やスピーチが挙げられる。豊後高田市の弁論大会は，今年ですでに33回継続されている。

方言が，地域振興や象徴として商品名や看板，ポスター，キャラクター名，キャッチフレーズなどに効果的に用いられることも多く，屋外や店先で独特の方言景観を形成している。筆者も山口方言が用いられた方言景観について，方言ラジオ体操や昔話などとともに紹介したことがある（池田 2011，2017）。井上ほか（2013）では，「最近は方言が文字に記され，目で見られるようになりました」として，日本国内外の，方言看板や方言グッズが数多く紹介されている。

そのような中でも，「方言かるた」は，現職教員への方言教育を目的としたものであり，「ぐんま方言を楽しむもの」，「保護されるべきもの」と研修講座のスライドにあるように，教育のなかでの方言の位置づけが明確である（佐藤髙司 2017）。

前田ほか（2017）では，方言を学ぶことは歴史を学ぶことにつながるという考えから，中学生を対象として，方言学習を通じて郷土愛を育み，郷土の歴史と古典学習に繋げることを目標にした教材開発のプロジェクトを，大学教員と中学校教員が連携して立ち上げている。

2011年の東日本大震災の際には，「方言スローガン」が，甚大な被害に打ちのめされた被災者を力づけたと言われる。震災・災害の際の方言活用は，1995年の阪神・淡路大震災の際や，2010年の宮崎県の口蹄疫禍のときにも行われた（井上ほか 2013）。最近の活動としては，「熊本支援方言プロジェクト」が挙げられる（今村ほか 2017）。新しい『中学校学習指導要領解説　国語編』（文部科学省 2017）では，「例えば，東日本大震災による被災地域においても，方言を使うことで被災者の心が癒やされるなどした事例が報告されるとともに，方言の保存・継承の取組そのものが地域コミュニティーの再生に寄与するなど，地域の復興に方言の力を活用する取組も進められている。こうした方言が担っている役割を，その表現の豊かさなど地域による言葉の多様性の面から十分理解し，方言を尊重する気持ちをもちながら，共通語と方言とを時と場合などに応じて適切に使い分けられるようにすることが大切である」と述べられている。

このような状況においても，共通語や方言に対する心理的距離・親密度は，地域差が大きいと言われている。方言を保存・継承して，次世代が使うことで復権させようという熱意にも地域差がある（佐藤・米田 1999，友定 2017）。方言の保存・継承の認識を育てるために，日ごろから教育現場でも方言に親しんでおく必要がある。

４．「山口方言みくじ」の作成

山口方言語彙を用いた「おみくじ」は，2017年７月と８月の山口県立大学オープンキャンパスの展示として，来場した高校生と日本語学研究室の大学生が，共に山口方言について親しみ，日本語の方言について再評価する契機とするために作成した。

作成の手順として，まず，日本語学研究室の３年生６名が，事前に各自で近隣の神社等に出向き，「おみくじ」の様式や代表的な項目について調査した。そして，収集した「おみくじ」について検討しつつ，高校生を中心としたオープンキャンパスの来場者にふさわしい項目を選定した。その結果，項目は，「学問」，「願いごと」，「健康」，「恋愛」，「転居」の５項目となった。評価基準は，「大吉」，「中吉」，「小

吉」，「末吉」の４段階とした。先に，各項目の「大吉」と「末吉」の内容を確定し，その間をできるだけ等間隔となるように割り振って，その状態・状況を，山口方言語彙を用いて言語化した。山口方言語彙は，大学生が日常使用しているものを中心に，自らは使用しないが見聞したことのある語彙も，文献（山中 1975，出穂ほか 2017，前田 2017）で意味や用法を確認しながら採り入れた。完成したおみくじの本文とその共通語訳は，**表１**のとおりである。今年度は，日本語学研究室の３年生６名のうち４名が山口県内出身者であったので，完成後に自宅に持ち帰り，家族にも山口方言として不自然・不適切な表現はないか確認してもらった。

おみくじの裏面には，遠方からの来場者向けに，山口県内の代表的な観光地を紹介するためのイラスト（**図１**）と解説を掲載した。そして，おみくじの形態に折り曲げたものをカプセル型玩具に詰めて展示し，配布した専用コインを入れて回す形式とした（**図２**）。

ところで，近年，初等・中等教育から高等教育まで，学校教育におけるパフォーマンス評価の手法として，ルーブリック形式の評価表が使用されることが多くなった。ルーブリックとは，「成功の度合いを示す数値的な尺度（scale）と，それぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述語（descriptor）から成る評価指標」とされている（石井 2005）。ルーブリックを作成する際には，評価対象を定め，評価項目を検討し，評価基準を何段階にするか決めて，最大のパフォーマンスと最小のパフォーマンスの内容を固定してから，その間を等間隔に割り振って，内容を言語化する。「おみくじ」の作成方法やパフォーマンス課題の目標を言語化する手順は，ルーブリックそのものである。このたびの「おみくじ」の作成は，日ごろ授業や学生の課外活動を評価するためにルーブリックを作成し使用しているなかで，類似性を着想したものであった。

５．おわりに

日本語学研究室では，山口方言について親しみ，日本語の方言について再評価する契機とするために，山口方言語彙を用いた「おみくじ」を作成した。近年の初等・中等教育では，我が国の言語文化に関する事項として，「共通語と方言の果たす役割」について理解することが求められている。この「方言みくじ」が，国語や日本語のなかでの方言を考えるための一助となれば幸いである。

引用文献

出穂澄子・加治工真市・藤田勝良（2017）「Ⅲ方言基礎語彙」編集代表平山輝男，編集有元光彦『日本のことばシリーズ35 山口県のことば』pp.35-134，明治書院

池田史子（2011）「目で見るやまぐち方言」山口県立大学国際文化学部編『大学的やまぐちガイド―「歴史と文化」の新視点』pp.227-233，昭和堂

池田史子（2017）「Ⅴ生活の中のことば」編集代表平山輝男，編集有元光彦『日本のことばシリーズ35 山口県のことば』pp.147-172，明治書院

石井真英（2005）「ルーブリック」田中耕治編『よくわかる教育評価』pp.48-49，ミネルヴァ書房

今村かほる（2004）「学習指導要領と小学校教科書に見る方言と共通語（１）―昭和22年版（試案）から小昭和26年改訂版まで―」『弘学大語文』30，pp.1-16，弘前学院大学国語国文学会

今村かほる（2005）「学習指導要領と小学校教科書に見る方言と共通語（２）―昭和33年版―」『弘学大語文』31，pp.1-16，弘前学院大学国語国文学会

今村かほる（2008a）「学習指導要領と小学校国語教科書（３）昭和43年版」『弘学大語文』34，pp.左6-19，弘前学院大学国語国文学会

今村かほる（2008b）「国語教育における『方言と共通語』教育」『日本方言研究会第86回研究発表会 発表原稿集』，pp.19-29，日本方言研究会

今村かほる（2014）「医療・福祉と方言：東日本大震災を経験して」『言文』61，pp.19-33，福島大学国語教育文化学会，今村2013の講演に基づく寄稿

今村かほる・二階堂整・岩城裕之・松田美香（2017）「熊本支援方言プロジェクトを振り返って」『日本方言研究会第105回研究発表会 発表原稿集』pp.41-48，日本方言研究会
井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下暁美（2013）『魅せる方言―地域語の底力―』，「言語経済学研究会：地域語の経済と社会―方言みやげ・グッズとその周辺―」として2008年６月より2011年10月まで三省堂のウェブページに連載されたものの精選版，連載は2016年３月まで
河野智文（2012）「学習指導要領の領域移動による教科書教材の変化―小学校国語科『方言と共通語』の場合―」『教育実践研究』20，pp.1-6，福岡教育大学教育実践研究指導センター
小林隆（2004）「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7(1)，pp.105-107，社会言語科学会
国立教育政策研究所学習指導要領データベース作成委員会（2001.3.31完成，2014.8.15最新訂正版）「学習指導要領データベース」 http://www.nier.go.jp/guideline/index.htm（最終閲覧2017.11.13）
前田桂子（2017）「Ⅳ俚言」編集代表平山輝男，編集有元光彦『日本のことばシリーズ35 山口県のことば』pp.135-146，明治書院
前田桂子・平瀬正賢・北村由紀・山田喜彦・川渕正昭・山中典希（2017）「通史的視点による長崎方言をとり入れた郷土愛を育む中学校国語授業の新規的研究」『教育実践総合センター紀要』16，pp.11-20，長崎大学教育学部附属教育実践総合センター
文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm（最終閲覧2017.11.13）
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm（最終閲覧2017.11.13）
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説　国語編』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm（最終閲覧2017.11.13）
佐藤和之・米田正人（1999）『どうなる日本のことば』，大修館書店
佐藤亮一（2006）「方言の復活と方言大会―山形県三川町の全国方言大会を中心に―」『日本語学』25(1)，pp.60-68
佐藤髙司（2017）「現職教員への方言教育」『共愛学園前橋国際大学論集』17，pp.51-56，共愛学園前橋国際大学
柴田武（1958）『日本の方言』，岩波書店
田中ゆかり（2007）「『方言コスプレ』にみる『方言おもちゃ化』の時代」『文学』8(6)，pp.123-133，岩波書店
田中ゆかり（2011）『方言コスプレの時代―ニセ関西弁から龍馬語まで』，岩波書店
東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う，方言で救う―3.11被災地からの提言』，ひつじ書房
友定賢治（2017）「方言の変容と復権」『日本語学』36(12)，pp.154-163，明治書院
山中六彦（1975）『山口県方言辞典 新訂版』，マツノ書店

付　記

「山口方言みくじ」は，筆者の企画により，日本語学研究室３年生の阿座上千聖・上領優香・重藤理子・中川陽加・本村瑞希・吉兼美佳によって作成されました。おみくじの本文に用いた山口方言語彙は，学内外の複数の山口方言話者の方々にご助言をいただきました。裏面の挿絵については，Webデザイン研究室３年生の賀戸亜子，生活美学研究室３年生の岸田朋花の協力を得ました（敬称略）。ここに記して感謝申し上げます。

表１．山口方言語彙を用いた「おみくじ」の本文と共通語訳

	大吉	中吉	小吉	末吉
学問	せわーなく，じょーに知識がへぁーる。試験もみやすい。	そねーに頑張っちょったら，行きてぁーとこに行けるっちゃ。	今より，よーけ頑張らんにゃ，志望校にたわんよ。試験には，鉛筆が４ぼんあるとえーよ。	てれんこぱれんこしちょったらつまらん。わやになったもんは，どねーにもならん。
	多くの知識がすらすら簡単に覚えられる。試験も難なく進む。	今のまま努力を続けることで，望みの進路に進めるよ。	今以上に努力しないと，志望校に合格しないよ。試験には，鉛筆が４本あるといいよ。	何もしないでふらふらしているといけない。台無しになった努力は，どうにもならない。
願いごと	あねーこねー言わんでも，いっそせんないことは起こらんいね。	よーけ願わんかったら，みやすく叶うそよ。	思うようになるんじゃけど，くじをくられんようにしちょかんといけん。	やしすると，夢が叶わんで，よいよあずる。
	あれこれ言わなくても，全く辛いことは起こらないよ。	たくさん願わなかったら，簡単に叶うんだよ。	思うようになるが，叱られないようにする必要がある。	ずるいことをすると，夢が叶わないで，本当に困る。
健康	ちゃんと寝ちょったら，まめでおられるいね。	びっしゃになって風邪引いたらわややけ，気を付けんにゃー。	ひやいものは控えちょきー。トイレから出れんくなる。	体がえろーなったら，休みんさいね。
	ちゃんと寝ていたら，元気でいられるよ。	(雨で)びしゃびしゃになって風邪を引いたらいけないから，気を付けなさい。	冷たいものは控えなさい。トイレから出られなくなる。	体が疲れたら，休みなさいね。
恋愛	全部あんたの好きなよーになるけー，あんきにしちょってもええよ。	好きな人の名前をぶちいかい声でたっけったら，うまくいくかもしれんいね。	おどれの恋が大事じゃったら，じら言わんと過ごしーね。	秘密がばれておーごとになるかもしれんよ。
	全部あなたの好きなようになるから，気楽にしていてもいいよ。	好きな人の名前をとても大きい声で叫んだら，うまくいくかもしれないよ。	己の恋が大事ならば，わがまま言わずに過ごしなさい。	秘密がばれて大変なことになるかもしれない。
転居	どねーないとしーさん。ほがな立派な家に住めるじゃろー。	宮野に逃げてきーさん。なんぼーでも，えー家があるけー。	こまい家に住んでみー，そひたらほっかりするけー。	文句をゆわんで，実家におりー。実家通いでも死にゃーせん。
	どのようにでもしなさい。大層立派な家に住めるだろう。	宮野に転居して来なさい。いくらでもいい家があるよ。	小さい家に住んでみなさい。それならば，一安心するよ。	文句を言わないで，実家にいなさい。実家通いでも死にはしない。

注：各項目の上段は山口方言，下段はその共通語訳である。実際のおみくじには，山口方言のみを掲載し，共通語訳は載せていない。おみくじに用いた山口方言語彙の解説は，ポスターで行った。おみくじの裏面には，山口県内の代表的な観光地を紹介するためのイラストと解説を印刷した。

図１．おみくじ裏面の山口県観光案内のイラスト

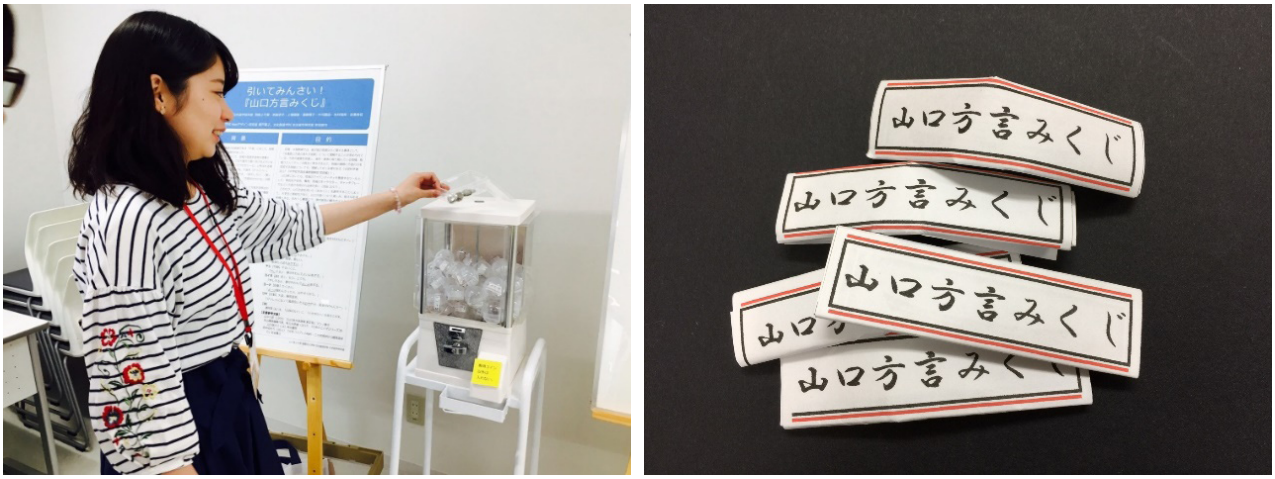

図２．「山口方言みくじ」の展示とおみくじ

Omikuji Produced as a Japanese Language Teaching Material Featuring Vocabulary of the Yamaguchi Dialect

Fumiko Ikeda

Abstract

The views about dialects have changed with the times and society. There was a period of time when many people thought dialects were worthless and were to be eradicated and replaced by the standard language. However, recently, dialects have acquired the status of entertainment media that made them fun and interesting. In accordance with the recent changes in the dialect views, the positioning of dialects has been reviewed in Japanese language education. Because of this, people can separately use standard Japanese and dialects depending on the scene. As an attempt to reevaluate the importance of dialects in Japanese, we produced *Omikuji* as a language teaching material featuring Vocabulary of the Yamaguchi dialect.